

2019年度(R1年度)前期  
電気電子工学科

物理学基礎AI  
(第15回)  
—惑星の運動—

2019年7月29日

# 第15回の要点

- 惑星と太陽の間に万有引力

$$F = -G \frac{Mm}{r^2} \frac{\mathbf{r}}{|\mathbf{r}|}$$

が働いているとすると、運動の法則(運動方程式)からケプラーの法則を導くことができる。

- 万有引力は中心力であるから、惑星の太陽のまわりの角運動量は保存され、面積速度は一定となる。
- エネルギー保存則と角運動量保存則を用いて運動方程式を解くと、惑星の軌道は太陽を1つの焦点とする楕円になる。

# ケプラーの法則

惑星の運動の観測から、3つの法則が示された。

## 第1法則

惑星の軌道は、太陽を1つの焦点とする**楕円**である。

## 第2法則

惑星の**面積速度**は一定である。

※面積速度：惑星と太陽を結ぶ線分が  
単位時間に掃く面積

## 第3法則

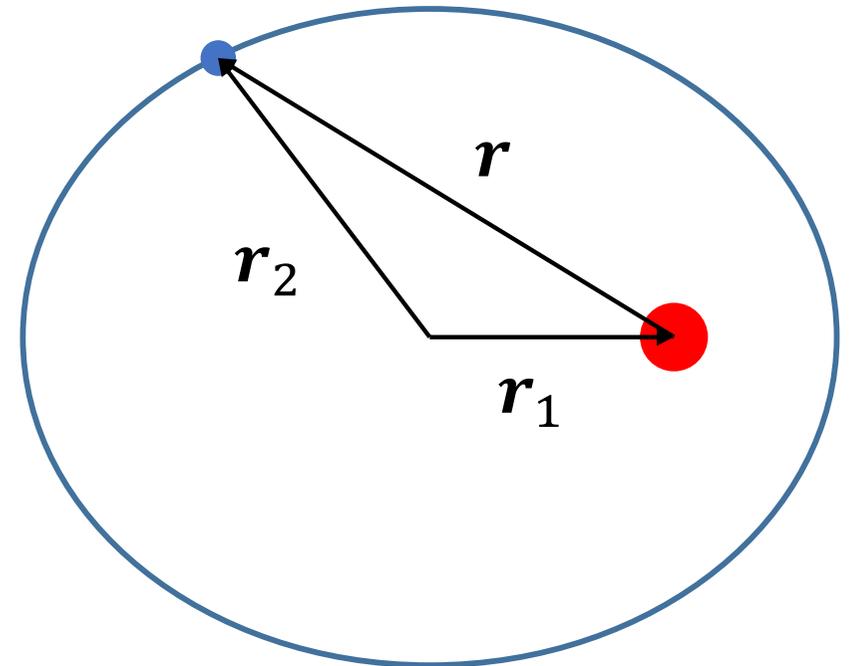
惑星の公転**周期の2乗**は、  
平均軌道**半径の3乗**に比例する。

# 万有引力

惑星と太陽の間に万有引力

$$\begin{aligned} \mathbf{F} &= -G \frac{Mm}{r^2} \frac{\mathbf{r}}{|\mathbf{r}|} = -G \frac{Mm}{|\mathbf{r}|^2} \frac{\mathbf{r}}{|\mathbf{r}|} \\ &= -G \frac{Mm}{|\mathbf{r}_2 - \mathbf{r}_1|^2} \frac{\mathbf{r}_2 - \mathbf{r}_1}{|\mathbf{r}_2 - \mathbf{r}_1|} \end{aligned}$$

が働いているとすると、  
運動の法則(運動方程式)  
からケプラーの法則を導く  
ことができる。



## 2体問題

万有引力を及ぼし合う惑星と太陽の運動を考える。

惑星の運動方程式

$$m \frac{d^2 \mathbf{r}_p}{dt^2} = -G \frac{Mm}{|\mathbf{r}_p - \mathbf{r}_s|^2} \frac{\mathbf{r}_p - \mathbf{r}_s}{|\mathbf{r}_p - \mathbf{r}_s|} = -\mathbf{F} \quad \dots \textcircled{1}$$

太陽の運動方程式

$$M \frac{d^2 \mathbf{r}_s}{dt^2} = -G \frac{Mm}{|\mathbf{r}_s - \mathbf{r}_p|^2} \frac{\mathbf{r}_s - \mathbf{r}_p}{|\mathbf{r}_s - \mathbf{r}_p|} = \mathbf{F} \quad \dots \textcircled{2}$$

①  $\times M$  - ②  $\times m$  より

$$Mm \left( \frac{d^2 \mathbf{r}_p}{dt^2} - \frac{d^2 \mathbf{r}_s}{dt^2} \right) = -(M + m)\mathbf{F}$$

## 2体問題

惑星と太陽の運動方程式より

$$Mm \left( \frac{d^2 \mathbf{r}_p}{dt^2} - \frac{d^2 \mathbf{r}_s}{dt^2} \right) = -(M + m) \mathbf{F}$$

太陽を中心とする相対座標  $\mathbf{r} = \mathbf{r}_p - \mathbf{r}_s$  について

$$\frac{Mm}{M + m} \frac{d^2 \mathbf{r}}{dt^2} = -\mathbf{F} = -G \frac{Mm}{|\mathbf{r}|^2} \frac{\mathbf{r}}{|\mathbf{r}|}$$

換算質量  $\mu = \frac{Mm}{M + m}$  を用いると

$$\mu \frac{d^2 \mathbf{r}}{dt^2} = -G \frac{Mm}{r^2} \frac{\mathbf{r}}{|\mathbf{r}|}$$

$M \gg m$  のときは、 $\mu \cong m$  となる。

# 角運動量

運動方程式

$$\mu \frac{d^2 \mathbf{r}}{dt^2} = -G \frac{Mm}{r^2} \frac{\mathbf{r}}{|\mathbf{r}|}$$

と  $\mathbf{r}$  との外積をとると、万有引力は中心力だから

$$\mathbf{r} \times \mu \frac{d^2 \mathbf{r}}{dt^2} = -\mathbf{r} \times G \frac{Mm}{r^2} \frac{\mathbf{r}}{|\mathbf{r}|} = \mathbf{0}$$

したがって

$$\mathbf{r} \times \mu \frac{d\dot{\mathbf{r}}}{dt} = \frac{d}{dt} (\mu \mathbf{r} \times \dot{\mathbf{r}}) = \mathbf{0}$$

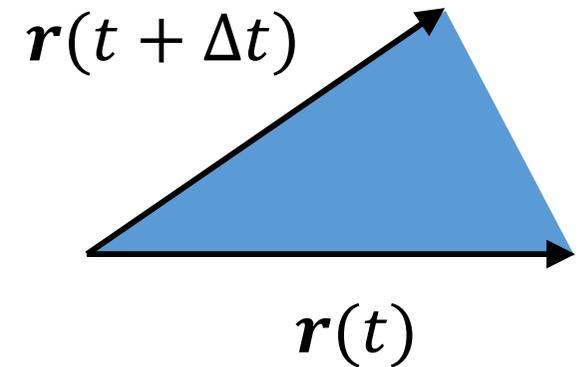
$$\therefore \mu \mathbf{r} \times \dot{\mathbf{r}} = \mu \mathbf{r} \times \mathbf{v} = \mathbf{L} \quad (\text{一定})$$

すなわち、角運動量  $\mathbf{L}$  は保存される。

# 面積速度

面積速度  $\dot{S}$  は、単位時間あたりに位置ベクトル  $r$  が掃く面積であり、

$$\begin{aligned}\dot{S} &= \frac{1}{\Delta t} \frac{|\mathbf{r}(t) \times \mathbf{r}(t + \Delta t)|}{2} \\ &= \frac{1}{2\Delta t} \left| \mathbf{r}(t) \times \left( \mathbf{r}(t) + \frac{d\mathbf{r}}{dt} \Delta t \right) \right| \\ &= \frac{1}{2} \left| \mathbf{r}(t) \times \frac{d\mathbf{r}}{dt} \right| = \frac{1}{2} |\mathbf{r} \times \mathbf{v}| \\ &= \frac{1}{2\mu} |\mathbf{r} \times \mathbf{p}| = \frac{|L|}{2\mu}\end{aligned}$$



角運動量  $L$  が保存されるとき、面積速度は一定である。

# エネルギー積分

運動方程式

$$\mu \frac{d^2 \mathbf{r}}{dt^2} = -G \frac{Mm}{r^2} \frac{\mathbf{r}}{|\mathbf{r}|}$$

と  $\dot{\mathbf{r}}$  の内積をとって時間で積分(エネルギー積分)すると

$$\int_{t_0}^t \mu \frac{d^2 \mathbf{r}}{dt^2} \cdot \dot{\mathbf{r}} dt = - \int_{t_0}^t G \frac{Mm}{r^2} \frac{\mathbf{r}}{|\mathbf{r}|} \cdot \frac{d\mathbf{r}}{dt} dt$$

$$\int_{t_0}^t \frac{d}{dt} \left( \frac{1}{2} \mu \dot{\mathbf{r}}^2 \right) dt + \int_{r_0}^r G \frac{Mm}{r^2} dr = 0$$

$$\therefore \frac{1}{2} \mu v^2 - G \frac{Mm}{r} = E \quad (\text{一定})$$

すなわち、**エネルギー保存則**が成り立つ。

# 極座標への変換

惑星の軌道面を  $xy$  平面として

$$x = r \cos \theta, y = r \sin \theta$$

と極座標で表すと

$$\dot{x} = \dot{r} \cos \theta - r \dot{\theta} \sin \theta$$

$$\dot{y} = \dot{r} \sin \theta + r \dot{\theta} \cos \theta$$

であるから

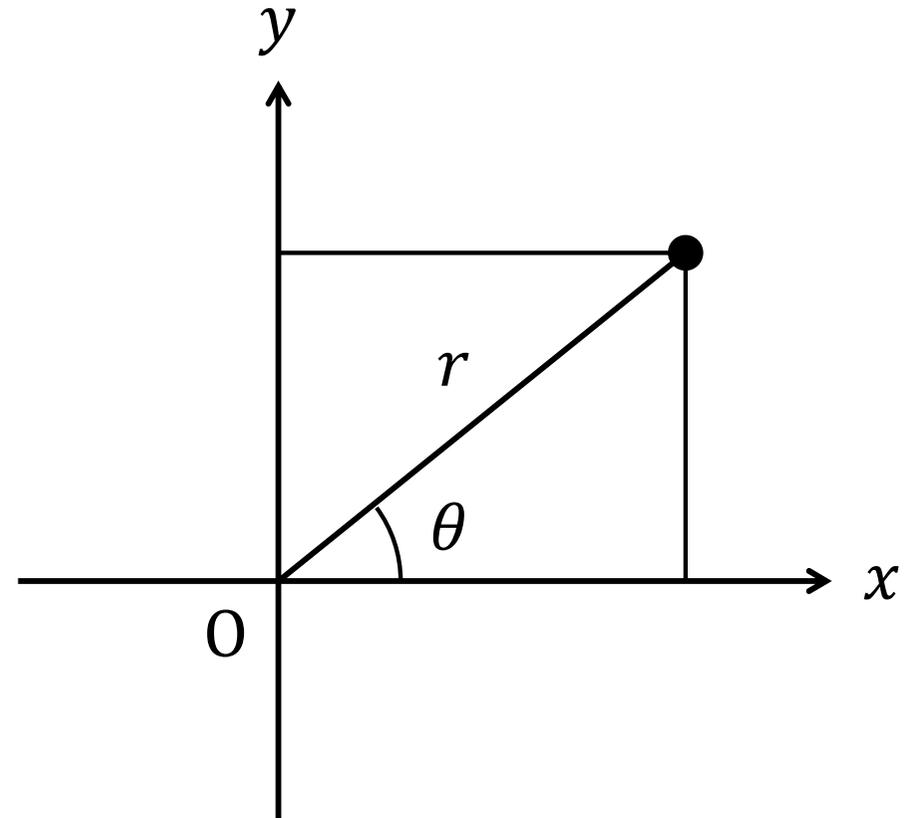
$$v^2 = \dot{x}^2 + \dot{y}^2 = \dot{r}^2 + r^2 \dot{\theta}^2$$

$$|\mathbf{r} \times \mathbf{v}| = x\dot{y} - y\dot{x}$$

$$= r \cos \theta (\dot{r} \sin \theta + r \dot{\theta} \cos \theta)$$

$$- r \sin \theta (\dot{r} \cos \theta - r \dot{\theta} \sin \theta)$$

$$= r^2 \dot{\theta}$$



# 極座標表示

エネルギー保存則と角運動量保存則より

$$\frac{1}{2}\mu v^2 - G \frac{Mm}{r} = E$$

$$\mu \mathbf{r} \times \mathbf{v} = L$$

これを極座標で表すと

$$\frac{1}{2}\mu(\dot{r}^2 + r^2\dot{\theta}^2) - G \frac{Mm}{r} = E$$

$$\mu r^2 \dot{\theta} = L$$

この2式より  $\dot{\theta}$  を消去すると

$$\frac{1}{2}\mu\dot{r}^2 + \frac{L^2}{2\mu r^2} - G \frac{Mm}{r} = E$$

# エネルギーの関係式

エネルギー保存則と角運動量保存則より

$$\frac{1}{2}\mu\dot{r}^2 + \frac{L^2}{2\mu r^2} - G\frac{Mm}{r} = E$$

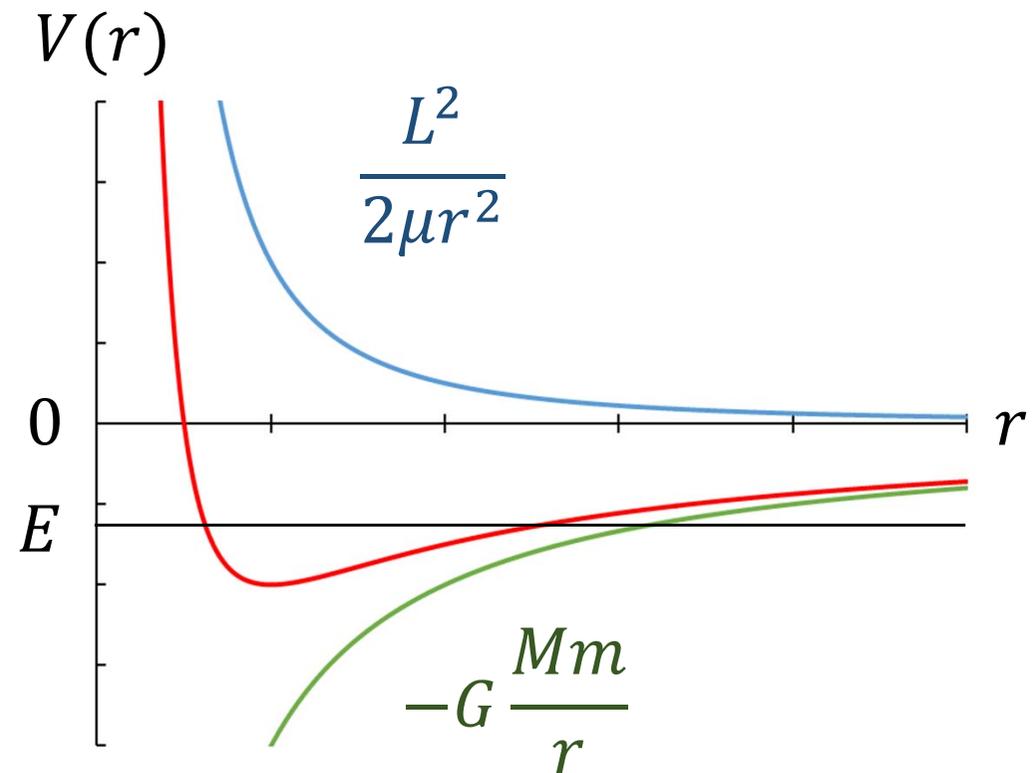
ここで

$$V(r) = \frac{L^2}{2\mu r^2} - G\frac{Mm}{r}$$

とすると

$$V(r) = E - \frac{1}{2}\mu\dot{r}^2 \leq E$$

であるから、 $E < 0$  のとき  
軌道は有界である。



# 軌道の方程式

エネルギー保存則と角運動量保存則より

$$\frac{1}{2}\mu\dot{r}^2 + \frac{L^2}{2\mu r^2} - G\frac{Mm}{r} = E$$

ここで、惑星の軌道の方程式を求めるために

$$\dot{r} = \frac{dr}{dt} = \frac{d\theta}{dt} \frac{dr}{d\theta} = \dot{\theta} \frac{dr}{d\theta} = \frac{L}{\mu r^2} \frac{dr}{d\theta}$$

より、時間  $t$  の微分を角度  $\theta$  の微分に変換すると

$$\frac{L^2}{2\mu} \left( \frac{1}{r^2} \frac{dr}{d\theta} \right)^2 + \frac{L^2}{2\mu r^2} - G\frac{Mm}{r} = E$$

# 軌道の方程式

エネルギー保存則と角運動量保存則より

$$\frac{L^2}{2\mu} \left( \frac{1}{r^2} \frac{dr}{d\theta} \right)^2 + \frac{L^2}{2\mu r^2} - G \frac{Mm}{r} = E$$

さらに、 $u = \frac{1}{r}$  と変数変換すると  $\frac{du}{d\theta} = -\frac{1}{r^2} \frac{dr}{d\theta}$  だから

$$\frac{L^2}{2\mu} \left( \frac{du}{d\theta} \right)^2 + \frac{L^2}{2\mu} u^2 - GMmu = E$$

$$\therefore \left( \frac{du}{d\theta} \right)^2 = \frac{2\mu E}{L^2} - u^2 + \frac{2\mu GMm}{L^2} u$$

# 軌道の方程式

エネルギー保存則と角運動量保存則より

$$\left(\frac{du}{d\theta}\right)^2 = \frac{2\mu E}{L^2} - u^2 + \frac{2\mu GMm}{L^2}u$$

$$= \frac{2\mu E}{L^2} + \frac{(\mu GMm)^2}{L^4} - \left(u - \frac{\mu GMm}{L^2}\right)^2$$

ここで、 $A^2 = \frac{2\mu E}{L^2} + \frac{(\mu GMm)^2}{L^4}$ ,  $B = \frac{\mu GMm}{L^2}$  とおくと

$$\frac{du}{d\theta} = \pm \sqrt{A^2 - (u - B)^2}$$

# 軌道の方程式

エネルギー保存則と角運動量保存則より

$$\frac{du}{d\theta} = \pm \sqrt{A^2 - (u - B)^2}$$

この解は

$$u = B + A \cos \theta$$

したがって

$$r = \frac{1}{u} = \frac{1}{B + A \cos \theta} = \frac{l}{1 + \epsilon \cos \theta}$$

$$\text{ただし、} l = \frac{1}{B}, \epsilon = \frac{A}{B}$$

# 軌道の方程式

運動方程式の解は

$$r = \frac{1}{u} = \frac{1}{B + A \cos \theta} = \frac{l}{1 + \epsilon \cos \theta}$$

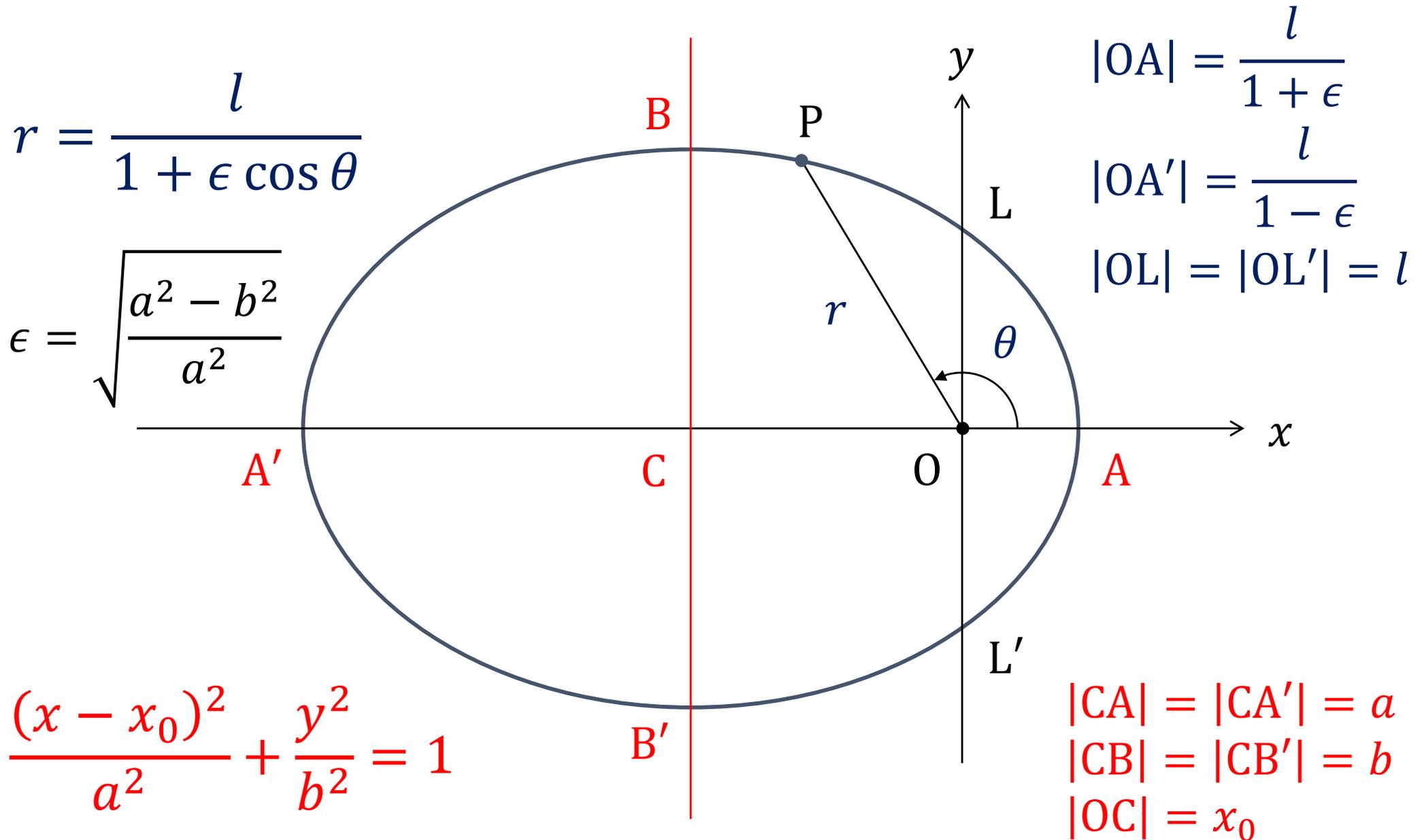
ただし、

$$l = \frac{1}{B} = \frac{L^2}{\mu GMm}$$

$$\epsilon = \frac{A}{B} = \sqrt{1 + \frac{2EL^2}{\mu(GMm)^2}}$$

$E < 0$  のとき  $\epsilon < 1$  となり、これは半通径  $l$ 、離心率  $\epsilon$  の楕円の方程式の極座標表示である。

# 楕円軌道



# 第15回のまとめ

- 惑星と太陽の間に万有引力

$$F = -G \frac{Mm}{r^2} \frac{\mathbf{r}}{|\mathbf{r}|}$$

が働いているとすると、運動の法則(運動方程式)からケプラーの法則を導くことができる。

- 万有引力は中心力であるから、惑星の太陽のまわりの角運動量は保存され、面積速度は一定となる。
- エネルギー保存則と角運動量保存則を用いて運動方程式を解くと、惑星の軌道は太陽を1つの焦点とする楕円になる。